

紀の国温州(きのくにうんしゅう)

登録番号：第1235号

育成者：森本純平 中屋英治 田中 守

登録年月日：昭和61年11月21日

東 史郎 木下凱弘 和田年裕

登録者：和歌山県(和歌山市小松原

来歴：「丹生系温州」の珠心胚実生

通り1-1)

特 性

■栽培特性

樹勢は極めて強く、葉身が大きく新梢、節間ともに長めで枝の分岐角度が狭い。樹姿は若木のうちは上向性であるが成木化するにしたがい開張し、樹冠拡大が早くウンシュウミカンとしては大樹となる。植栽間隔は、密植すると立ち枝が増加し、結実不良となるため、地力の低いところでも4m程度は確保したい。

結実性は、隔年結果性が強く、生理落果期間が比較的長い。特に初期結実が劣るので、支柱を用いて枝を誘引し、開張させて結実促進を図る。誘引に当たっては、枝の分岐角度が狭く裂けやすいので注意を要する。

整枝・せん定は、開心自然形を基本に第一亜主枝を長めに形成して充実を図り、樹幅の大きな樹高率の低い整枝とする。側枝は、結実の多い横向きから下垂ぎみの枝を配置し、整枝上不都合な内向枝、上向枝等を除き、間引き中心の軽いせん定とすることが肝要である。

摘果に際しては、結果量が少なくても極大果は少ないが、果皮粗く品質の悪い5葉以上の有葉果や果梗枝の太い天成り果をできるだけ早期に摘果して、翌年の結果母枝を確保するための予備枝として利用する。着果量の多い場合は、葉果比25-30を目安とするが、大枝単位の局部全摘果を組み込み連年結果へ誘導する。肥培管理は、他の一般品種より多めの施肥量とし、春、秋肥に重点を置き、3月上旬、5月下旬、10月下旬~11月上旬の3回に分施する。

なお、本品種栽培の最大のポイントは栄養生長と生殖生長のバランスをとり、連年安定結実を図ることにある。

■果実特性

幼果の初期発育が遅く、果面にしわの生じるものがあるが、後期には順調に肥大する。果梗枝は他の品種に比べて太く、果実の大きさは100-120gで、果形指数138前後の扁平果である。果皮は、厚さ中程度で滑らかで締まりが良く、浮皮果の発生は少ない。着色は黄橙色でやや淡いが、11月上旬から始まり下旬には完全着色する。

食味は、じょうのう膜にやや硬さを感じるが、多汁で糖度は12度以上、クエン酸は育成地で12月中旬に1.0%前後となり、「丹生系温州」より2週間程度早熟な普通温州である。

貯蔵性に富むため、現在は短期間の貯蔵により、最も風味の向上する2月を中心に出荷されている。

■病虫害抵抗性

通風および日照不良の栽培環境でそうか病の発生を見ることがある。ウイルス病に関しては、親品種の「丹生系温州」はタターリーフウイルスを保毒していたが、本品種は珠心胚実生により育成されたこともあり、原木はウイルスフリーであることが確認されている。

■地域適応性

日照条件と排水の良い傾斜地で、標高200m以下の冬期温暖な所が適する。また、樹勢制御ができる有効土層の浅い乾燥しやすい園地で優れた果実が生産できる。(中屋英治)